

硯 滴 考

[6]

令和二年六月吉日

公益財団法人

大平正芳記念財団



硯
滴
考

[6]

目次

はしがき	3
日米外交	4
大平正芳と私 <small>エドウィン・O・ライシャワー博士(元駐日大使)による序文</small>	10
市場一六九―ライシャワー大使事件―	46
奇妙な地図	50
What ㄿ How	55
照一隅	61
おわりに 鈴木岩男	67

はしがき

『大平正芳 人と思想』の英文版 (POSTWAR POLITICIAN) は祖母志げ子の肝いりで出版されました。序文を誰にお願いするかは、祖父母と夫婦ぐるみでお付き合いのあった E・O・ライシャワー元駐日大使にと始めから決まっていたようです。発刊前年にボストンの博士のご自宅を訪れお願いしたところ快諾をいただきました。

一九九〇年、ニューヨークで当財団主催の「大平正芳記念講演会」がカーター元大統領の講師で開かれ NHK でもその模様が放映されましたが、会に先立ち、大平裕常務理事 (当時) がカーター氏と会談し、この『大平正芳 人と思想』英文版をプレゼントしました。

英文版は、祖父の生誕八十年に合わせ企画されたものですが、やや出版が遅れ祖母の手に渡ったのは奇しくも祖母の亡くなる数時間前でした。父・裕によりますと、虎の門病院に届けられた本を手「立派な本が出来たわね。それにしても重いこと」と喜んでいたとのこと。おわりに (解説) は、財団顧問の鈴木岩男さんにお願いました。

令和二年六月吉日

公益財団法人大平正芳記念財団

理事長 大平 知範

日米外交

『私の履歴書』（日経・昭和53年）に所載。『大平正芳公著作集』1巻「講談社」に収録。池田・田中内閣の前後二回、通算四年余、外相として対米外交の重責を担った時代の「日米関係」を回想。後にカーター大統領をして「日米関係を高レベルに引き上げた総理」と言わしめた大平外交の素地はこの間に培われた。本稿を次編ライシャワー大使の大平論の序章として選んだ所以です。

日本外交の軸は、何といっても対米協調にある。それはひとり、政治や防衛、経済や貿易においてばかりでなく、思想や文化の領域においてもそうである。二国間の関係で、これほど濃密な関係は少ないし、これほど世界に大きい影響をもっている関係も類例が乏しいといえよう。

戦後アメリカは、「パックス・アメリカーナ」の理想を掲げて、世界の民主的な再建に希望と自信をもって臨んだ。初期においては、すべてはスムーズに進むかみえたが、その後

の経過は必ずしも思うに任せなかった。ソ連に対しては、冷戦から共存へ、中国に対しては封じ込めから和解へ、ベトナムでは介入から収束へと転じた。かくてアメリカは、じりじりとはあるが、当初の路線を転換しなければならなくなり、ベトナムのようにその威信を損なう羽目に追い込まれた場合もあった。経済においては、世界経済の自由化と協調、さらには発展途上国への援助等に、アメリカは先頭に立って指導的役割を果たしてきた。ところがドルと金との兌換停止の前後から、アメリカはその世界経済の指導力にかなりの衰えを見せはじめた。そうした対外的蹉跌に加えて、アメリカはその内政面においても、諸々の社会的紐帯が衰えを見せ、それを支えるモラルにも弛緩を招くに至った。

こうした戦後の経過は、アメリカにとって大きい試練であったが、それがそのまま世界にとつてもきびしい成行きであった。たしかにアメリカは、戦後世界のために多くのことをなしたが、そのため多くのものを失ったようである。しかし、それにもかかわらずアメリカは今日、依然として世界に対して最も大きい影響力と責任をもつ大国である。また日本にとつても、かけがえのない友好国であり、パートナーであることに変わりはない。

私はその間、前後二回、通算四年余り、外務大臣として対米関係の調整に当たった。そしてディーン・ラスク、ウィリアム・ロジャース、ヘンリー・キッシンジャーの三代にわたる

國務長官と、終始楽しく仕事を共にすることができたことを悦んでいる。

ラスク氏は、ケネディ、ジョンソン兩大統領の下において、冷戦外交の手堅い担い手として活躍したが、現在では公務を退いて田園に帰り、静かな余生を楽しまれている。ロジャース氏は、対話と協調の時代にすぐれた対応力を発揮され、その率直さと暖かい人間味は、内外の評価と尊敬をあつめた。今ではニューヨークとワシントンで、弁護士として活躍されている。またキッシンジャー氏は、危機的状況を迎えた世界におけるスケールの大きい外交戦略家として、すでに定評のあるところである。國務長官を退かれてからは、世界待望のメモワールを執筆中と聞いている。

私は、この三人の友人と、相互信頼の中で仕事を共にすることができたばかりでなく、今日にいたるまで、友情と信頼をもち続けていることを誇りに思っている。この方々と私は、日米二国間の問題はもとより、中国問題、ベトナム問題、エネルギー問題、世界経済の問題等につき頻繁に話し合い、協力し合った。

だが、それらのいずれの問題についても、日米間の立場と見解は必ずしも一致したわけではない。しかし、外交においては、たとえ合意の達成ができなくても、お互いにその立場を理解し合っていることが不可欠であり、相互の理解と信頼は、合意を達成することに劣らず

重要である。とりわけ日米間においては、そのことは絶対といってよいほど大切である。

それにつけても思い出すのは、石油危機直後のキッシンジャー国務長官との折衝である。

昭和四十八年十月は、われわれにとつて忘れ難い歴史の節目であった。いうところの石油ショックが発生し、世界経済全体がオモチャ箱をひっくり返したような混乱に見舞われた。わが国は、ほとんど石油を産出しない国であり、しかも所要エネルギー資源の中で、石油の占めるシェアが滅法高い国でもある。日本は戦後二十数年間、一バーレル当り二ドル内外の安定した値段で、いくらでも、何の不安もなく石油を輸入することができた。そして経済は飛躍的な成長を記録することができた。その石油が一挙に四倍にも値上りしたばかりでなく、事実、今後供給が保証されるかどうか判らないという、大いなる不安の中に投げこまれたのである。

政府も民間も、全く途方に暮れた。われわれのよつて立つ基盤自体に大きい亀裂が生じ、動揺が起きたからである。右往左往するのも無理はなかった。外相である私に対しても、政府の内外から、中近東に対する外交方針をアラブ寄りに転換するよう強い要請が出始めてきた。また、メジャー以外のルートから石油を確保する方途を講ずるよう、これまた各方面から強い圧力があつた。

しかし私は、産油国といえども、石油を売らなければやっていけないし、日本のような大口の安定した需要国の存在は、彼らにとつても大切な顧客である筈である。したがつて、何もそう周章狼狽することはないと観念し、これらの要請には終始クールに対処することにした。しかし、渴ききつた空気は容易におさまる気配をみせず、中近東政策の転換を求めめる声は、日増しに高まるばかりであつた。そこで私は、かならずしもその主張に賛成はできなかつたが、どうしても政府がやるというのであれば、事前にアメリカとの合意、少くともアメリカの理解を得ておかねばならぬと考へていた。

たまたま、その年の十一月十四日、キッシンジャー國務長官が、中近東諸国歴訪の帰途来日した。そこで私は、キッシンジャー長官に日本政府のアラブ政策を説明し、意見を求めたところ、彼は日本政府の方針に反対で、「中近東諸国に対する対応は、米政府に任せて欲しい。軽々にアラブ諸国に当ることは、むしろその軽侮を招く虞おそれがある。日本はむしろ消費国の立場で、エネルギーの技術開発や備蓄に協力されることが肝心である」ということであつた。

しかし、政府の中近東政策修正の決意はいよいよ固く、私は政府部内で、日と共に孤立化する状況に追い込まれた。私はキッシンジャー長官の東京滞在中、ついにその理解が得られ

なかつたので、ワシントンの安川大使に訓令して、執拗に交渉させた。その結果、米國務省もやっと「日本政府の中近東政策の修正には賛成できないが、かかる修正をせざるを得ない」という日本政府の立場は理解できる」という声明を出してくれた。かくして十一月二十二日、中近東政策の一部修正に関する二階堂官房長官の声明が出される運びとなつたのである。

こうしたいきさつを顧みるまでもなく、ラスク、ロジャース、キッシンジャーの歴代國務長官と私は、いずれの問題でも、必ずしも意見の一致をみていたとはいえない。しかし、いずれの場合においても、相互理解を欠いたことはなかつたと確信している。私はこれらの方々との交渉に、一抹の悔いも、一片の不信の影もなかつたことを喜んでいる。私は、日本とアメリカのために、そのことに満足を感じている。

大平正芳と私

エドウィン・O・ライシャワー博士（元駐日大使）による序文

— 英文大平伝記 —

『Postwar Politician - The Life of Former Prime Minister MASAYOSHI OHIRA』

（講談社インターナショナル・1990）所載

没後10年に刊行のPOSTWAR POLITICIAN—The Life of Former Prime Minister MASAYOSHI OHIRA（講談社インターナショナル・平成2年）の序文。同じく日本版『大平正芳—人と思想』（大平財団・平成2年）の序文。本稿は、その新訳。安保騒動後の日米関係を修復・強化へと軌道修正した二人の信頼関係の淵源を知る貴重な資料といえます。

大平正芳と私は、ともに一九二〇年、明治四三年生れである。日本、特に当時の日本では、数え年で自分の年を数えていたので、彼がなくなつた年は、われわれ二人とも七一歳と言うことになるが、実際には、私より七ヶ月早い生れだった。彼は二一七日しか年上でない

のに、よくふざけて自分のことを「センパイ」、この私を「コウハイ」と呼んだものである。

私の見た大平正芳像

しかし、年齢の近さだけが私の大平に対する特別な親近感の理由ではない。初対面の彼は、控えめでどんな人か、いささか分かりにくい印象だったが、その後会うたびに、私は彼に深い友情と信頼と尊敬の念を抱くようになった。そして、いつの間にか、私は彼の中に日本の将来を担うリーダーを見出すようになっていた。

大平は控え目に見えることにより目立つ人物であり、人に追従するように見えることで人を指導する人物だった。その理由は、彼が未来についてのヴィジョンを持っていたからといえる。（戦後）ほとんどの日本人が自分を見失い、生きるための指針を必死に求めていた時にも、彼の視座からすれば（復興のため）前進するには、前もって国民の広い理解が必要不可欠であることをよく知っていた。また、国民がその方針に従う心の準備が必要なこともよ

く承知していた。そのため、人々に無理強いするようなことはしなかった。しかし、その時点で、彼のヴィジョンは、早晚すべての国が地球規模の秩序を必要とする時が必ず来る、とはるか未来を予見していたのだ。でも、その時点では、日本がまだまだその役割を担う用意が出来ていない。そのことを知っていたので、あえて物議を醸すようなことはしないで、満を持して来たるべき時に備えていたのである。

大平は、偉大な才能を持つ天性の政治家であった。それだけに、彼がその気になれば、日本をいま以上に大きく前進させることが出来たかもしれない。しかし、もし彼がその時代に実際にそうしていたなら、おそらく彼はその後に出たような政治の指導権を掴むチャンスを逸して、他のダイナミズムに乏しい凡庸な政治家の後塵を拝すことになったであろう。今でこそ、日本は他のいかなる国にも劣らない工業力と経済力を持つ大国となったが、かつての日本にはまだそこまでの強さはなかった。しかも、他の先進諸国やアジアの多くの国々、とりわけ日本の近隣諸国には深い怨念が残っていた。それだけに、大平自身、その当時は、自らの目的を達成するにはそれなりの時間がかかることをよく承知していた。それでも、彼は、その時から明らかに「強い日本」を指す計画を持っていたのだ。世界がグローバルな

平和の秩序を創り出すためには日本も指導的な役割を果たす責任があることをその当時から認識していたからである。日本と世界各国に開かれた唯一の道は、世界貿易と国際正義への道である。そのことを大平ははつきりと認識していた。彼はそのゴールに向かつて、イソップ物語の亀のようにゆつくりと歩を進めた。時にはまるでその歩みを止めたかのように見えることすらあった。しかし、彼には明白な目的と確固たる信念があった。私の目に映った彼は、いかにも彼らしい謙虚さの中に屹立する巨人そのものであった。

大平は、エネルギーギッシユで卓越した人物だった。しかし、その数々の美質をひけらかすことはなかった。それらの資質は、そのめざましい財政運営能力と政治的ヴィジョンの構想力は勿論、その他のどれをとっても、彼を第一級の政治的リーダーたらしめる卓抜さに満ちていた。しかし、その中でも真に大平を傑出した人物としている点は、彼がすぐれた先見性を持っていたこと、そして、よりよい世界を作るための確乎たる指導理念を持ち続けていたことである。

私は、日本語に英語の「ポリティシャン」と「ステーツマン」をはつきり区別する言葉

があれば良いのに、と思うことがよくある。日本語ではそのいずれもが「政治家」と訳されるが、両者の間には天と地ほどの違いがある。ステーツマンとは、自らの政治生命を賭けるだけの政治的信条を持ち、その信条への明確な責任意識を持つ政治家のことである。勿論、ステーツマンも、ポリティシャンと同じく国民を上手く統御する手腕と資質を持っているが、それ以上のもの——即ち一連の明確な政治的信条の指針と、その大義に殉ずるだけの強靱な意志——を持っているのがステーツマンである。

かつて、大平は私に、自分がクリスチャンだと話してくれたことがある。後になって、彼が若い頃、街頭で福音伝道活動を行ったこと、その後、矢内原忠雄のもとでキリスト教・無教会派の教義について、より高度な教えを受けたことなどを知ることが出来た。私の推察では、このようなクリスチャンのバックグラウンドこそが、大平を単なるポリティシャンではなく、ステーツマンたらしめる人格と思想の形成に寄与したのではないだろうか。われわれ二人の間で、とり立てて信仰について議論をしたことはない。また、彼の日頃の政治活動や、将来の世界についてのヴィジョン、あるいはその基となる政治的信念・信条などについて、まとめて聞くという機会は遂になかった。そのため、私が心がけたことは、二人の間の

その都度の会話や、やり取り、その他の小さなエピソードの数々を通じて、彼の考え方や彼を動機付けたものが何だったのかなどを、ひたすら推察したに過ぎない。そこから浮かび上がった大平像は、単に老練なポリティシャンではなく、偉大なステーツマンそのものであった。こうして、彼のことを知れば知るほど私は、大平がいざ世界的な指導者になるだろう、と確信するようになっていた。

二人の生い立ちと青少年時代

大平と私は、時間的にも空間的にも、そう遠くないところで生れた。彼の生れ故郷は、瀬戸内海の東端近く、この内海を囲む三つの本島（本州・九州・四国）のうち最も小さな四国。その北東の一端にある村だった。彼の村は、私が生れた東京からほんの四〇〇マイル（六〇〇キロメートル）先にあった。鉄道がすでに日本の山裾に沿って張り巡らされ、汽船が内海を航海していた。だから、距離的にはそれほど遠くはなかったと言えよう。しかし、その距離にほぼ近いボストンからフィラデルフィア、あるいはシカゴからセントルイスの間のその当時の往来と比べると、彼にとってそれほど楽な行程ではなかったに違いない。その

距離の差は、日米の文化の違いとほぼ一世紀の時間差を考慮に入れれば、ある意味ではなほ大きいものだろう。日本が西欧に追いつくには、依然として多くのやるべきことが残されていたといえる。大平の生れた香川県は、まだまだ封建的旧弊に絆（ほだ）されていた。一九一〇年当時、香川から東京への道のりは、はてしなく遠いままだったといえる。

アメリカの少年と同時代の日本の少年との間の文化的ギャップは、それ以上に大きかった。当時、日本に住んでいる欧米人は極端に少なかった。私は、若き日の大平が一〇代後半までに、いわゆる「西洋人」を見たことがあったかどうか、それさえ疑わしいと思つてゐる。勿論、私のまわりには数多くの日本人の少年がいたが、私は彼らと行き来するまでにはいかなかった。彼らはからかい半分に「グドバイ」と声をかけ、「イジンパツパ、ネコパツパ」というなんとも訳しようのない言葉を浴びせかけて来たものである。これはおそらく、われわれの目の色の違いや聞き取れない言葉が、猫のそれと同じように神秘的に思えたからではなからうか。

日本の少年達は、真芯に当れば素晴らしい飛びを見せる小さな硬いゴムのボールで野球を

していた。しかし、私が仲間に入れてもらいたくて何時間も近くで立っけていても、決してお呼びではなかった。日本の少年達の内輪グループは、私のような一目でわかるよそ者に対し場所を用意してくれはしなかった。

私の若い頃は、ラディヤード・キプリングの時代の名残があった。私はキプリングの考え方を受け入れるつもりはなかった。私の両親は伝道教育者で、ミッションスクールを次々に立ち上げる仕事を助けていた。その運営に当っては、日本人の上司の部下になることに何のためらいもなかった。両親は、自分達が関係する日本人のキリスト教の指導者に対しても、多大の敬意を払っていた。父は、日本の仏教研究では少しは知られた存在だった。同僚の西洋人がそのことに難癖をつけて来た時などには、日本の仏教について十分な知識もなしに、この洗練された宗教を非難しようとするのは愚かであると指摘した。両親は、当時のイギリス人がアジアで持っていたラジの精神（支配者意識）などひとかけらも持っていなかった。どの分野の日本人の役人に対しても全幅の信頼を寄せていた。つまるところ、ここは彼らの国なのだ。そして彼らには自らの手で国を組織し、彼らに適すると思われる仕方統治する権利がある。そのような考えの持ち主だった。我が家では、ほぼ常時、二、三人の

召使を雇っていたが、その誰をも分け隔てなく家族のように遇した。彼らも夜の礼拝に参加をしたし、私たち子供の養育のためにも大きな役割を果たしてくれた。

私は、ごく自然に父と同じ態度を身につけ、成長するにつれ日本の経済的・軍事的強さ、その近代化のスピードに誇りを持つようになった。われわれ東京に住む数少ない西洋人の子供は、大帝国の首都としての東京に誇りを持っていた。われわれは、横浜や神戸の高慢ちな西洋人を嫌った。ここでは、一九世紀流の不愉快な態度が東京よりも多く残っている様子であった。われわれは、多くの西洋人が見せる軽蔑に日本人が憤りを持つことの良き理解者だった。当時、軍事的台頭が遅れたというだけの理由で、日本が比較的小さな帝国の分け前にしか与れないのは、どこか不公平である。そう思う日本人の感情についても理解できた。ロシア、ドイツ、フランスの三国が露骨な人種的パワーゲームを演じ、日本が一八九五年の中国との戦争で、ようやく手にした分け前の多くをはき出させた——この（三国干渉の）ニユースは、ほとんどの日本人と同じように、われわれを怒らせた。この3国がハイエナの群れのように、日本が放棄せざるを得なかった領土にむさぼりつくさまは、われわれの憤激を更に高めた。一九一九年のベルサイユ講和条約で（日本が）提案した人種的平等に関する

条約をアメリカ、カナダ、オーストラリアが不遜にも却下したときには、大部分の日本人がそうであったように、平等に扱われるべき国に対するあるまじき侮辱だと感じた。その行為は、明らかにそれまでの「東洋人」の移民に対する傍若無人な障壁政策の一環に過ぎないことが見えみえだつたからである。

「BIJ」すなわち「日本生まれ (Born In Japan)」として知られていたわれわれ若者は、明らかにアジアの民族主義者であつた。われわれのこの態度は日本の問題だけに限られてはしなかつた。われわれが当時の日本人同様、朝鮮や台湾における日本の帝国主義に対しては盲目であつたことは別にして、わが「BIJ」が、その当時激しく反対した点は、日本以外のアジア諸国のほとんどを併合したヨーロッパ列強の行為であり、さらに大多数の西洋人がアジア人に示していた尊大さや厚かましい優越感だつた。しかし、この民族主義的態度については、このあと他のほとんどの列強諸国が帝国の建設を遂に断念するに至つたのに、逆に一九二〇年代になって日本が帝国主義に遅れて回帰して来たこと——その日本の外交方針に対する疑念から、われわれの態度を変える契機となつてしまつた。そこに、日本の帝国主義の世界平和に対する脅威を見出したからである。

私はもちろん、日本人の友達がまったくいないわけではなかった。私は、町を歩くのに不自由しないだけの十分な日本語を身につけていた。父の教え子のなかには、英語の上達のために、年齢の違いもかまわず、われわれ子供と友達になろうとするものもいた。主に外国で育つて、日本のアメリカンスクールに通い、アメリカ的人種の坩堝の精神に染まり、完全にわれわれの仲間に溶け込んだ日本人もわずかながら存在していた。一部の華族出の日本人とは、その時と人により理由はいろいろだったが、常に交流があった。しかし、一九二七年に高校を卒業する前と、そのあとアメリカの大学に入学するために日本を離れるまでの間は、日本人の友達はほとんどできなくなった。それに続く八年間のアメリカとヨーロッパでの勉学の期間は、日本人との接触はほとんどなかった。その時は、まさに私の歴史への関心が古代の中国や日本へと向かった時期にもかかわらず、であった。

私と同じ年の正芳のような少年とのつき合いが少なかったことは、この私にとって何とも残念なことだった。私は彼から大変多くのことを学んだだろうし、彼もまた私から多くのことを学んだことだろうに。一つの理想的な世界——彼と私が共に成長し、共にキャリアを積む世界——がそこには存在したに違いない。しかしそれは、所詮、異なる星での夢物語に過

ぎなかつたのだ。現実には、文化的・人種的相違はわれわれを大きく隔てていたし、社会的障壁は多分もつと大きかつたからだ。私の父は尊敬を集める学究的な教育者で、正芳の父は地方の村の中流農家の家長であつた。今では、当時と比べて階級的隔たりはアメリカでは驚くほど縮まつたし、日本の場合はそれ以上に良くなっている。しかし、当時の差別の厳しさの比較からすれば、一九三〇年代になるといくらか和らいで来ていたとは言え、一九一〇年当時について言えば相当なものだつた。特に、厳しい封建制が取り除かれて四〇年しか経っていない日本では、とりわけそれは歴然としていた。

正芳と私が歩んだ道は、おそらく戦場を除いては交錯することはなかつただろう。その時代、われわれは大変な変化の世紀に突入していた。しかし、そのなかで、二人がどのような教育のコースをとるか、それぞれの意思に任されていた。彼は、その当時の日本の正規の教育コースを受けて大望を果たすという道を選んだ。それは、日本の教育の全学歴を終え官僚への道を進むことだつた。そしてそこからは、より厳しいキャリア官僚への急峻なスロープを登ること、そして更に政治の世界で指導的ポストを目指す道が残されていた。私の方は、ほかの中流階級の少年達と一緒に大学生活を送り、最終的には学問的関心が募るにつ

れ、大学教授への道を進んだ。

二人の若い頃を振り返ってみると、もしも厳格な階級的差別が存在せず、日本人と西洋人が交流することがもつと容易だったら、大平と私は、そのうちその確信を共有するに至つた世界の一体化の理想のために、もつと先駆的に、もつと素晴らしい貢献が出来たことだろうに。そう思うと本当に惜しまれてならない。それを言つても詮ないことだが、二人が五一歳という中年になつてからではなく、少年時代からずっと友情を育んでいたなら、どんなに素晴らしいことだつただろうか。

明治維新以降の自発的民主主義の系譜 — 大正デモクラシーをもたらした要因

大平の育つた幼少年期は、大正デモクラシーとして知られる時代の最盛期にあつていたが、実際には、日本のデモクラシーの歴史は、（大正以前からの）数十年に及ぶ年代区分がしにくい期間に次第に発展してきたのである。（明治維新で）古い封建制度が正式に終わりを告げた後の数年の内に、参政権をもつと広い層に与えよ、という強い要求が日本各地で高

まった。封建制度は一八六八年に崩壊し、早くも一八七〇年台初めには政党が結成されはじめ、参政権の要求は都市部の商人や農民の間でもごく普通になってきていた。

一八九〇年には、権威主義志向だった新政府も、民衆に若干の政治権力と市民権を認めることを余儀なくされた。しかし、その後、政府が驚いたことには、民衆はそれ以上のことを求めて来た。彼らは、一八九〇年の憲法で認められたある譲歩条項を利用して、当初の想定以上の政治的影響力を行使するようになった。選挙で選ばれた議員が政治家として、官選の為政者と権力を分かち合うようになる。そして、一九一三年（大正2年）までには、日本の内閣は選挙による議会、すなわち「国会」の多数派の参加や支持がなくてはうまく立ち行かなくなる。一九一三年は、しばしば大正デモクラシーの始まりと言われるが、そこには、それ以前の四〇年に及ぶ自発的な民主主義の発展の歴史があつたのである。

大正デモクラシーの申し子 ―ステーツマンとしての思想・理念・教養の培養期

一九一三年に続く数年間は、大平と私にとって最も大事な人間形成期にあたるが、それは

同時に、日本にとつても、かつてなくオープンで自由な時代を意味した。一九一八年には、日本で初めて、ほぼ完全な形の政党内閣が成立した。大英帝国、フランス、アメリカ合衆国という三つの民主主義国家が、(第一次大戦で)ドイツやオーストリア・ハンガリー帝国の独裁国家に勝利を収めたこと、そして最も後進的な独裁国家であったロシアが革命で崩壊したこと、それは新しい時代の明確なサインに思われた。こうして、日本の未来は、帝国主義的征服にあるのではなく、自由貿易と国際協力——とりわけアメリカ・イギリスとのその価値観の共有——にあることがいよいよ視野に入ってきた時代だったのだ。

その当時の社会的・知的な風潮は、大変リベラル色の強いものであった。知的・社会的自由の風が大都市だけでなく、日本全土を駆け抜け、正芳の住んでいる片田舎にも届いていた。同様のことは、合衆国でも起こっていたが、永いあいだ孤立して封建的であった日本で見られたようなハリケーン現象ほどにはならなかった。後年の大平の人生を特徴づけることになる民主主義精神と開かれたグローバルイズムは、明らかに、その精神と活力の多くを大正デモクラシーの時代——学生時代の彼を鼓舞してやまなかった時代——から生み出されたものである。

大平が進学をして故郷の村から都会高松へ移ったとき、彼は深い宗教的体験をした。このような逸話はすぐれて個人的で特殊なものだから、それを他人が理解したり説明したりするのは容易なことではない。しかし、私の見たところ、彼がこの特別な体験から多くのことを学び、それが後の彼の人生に深い影響を及ぼしたであろうことに疑いの余地はない。約一年間、キリスト教の巡回宣教師の影響を受け、夜は街頭で伝道の小冊子を配って過ごした。彼の師は、明らかにカリスマ的な人物で、この若い弟子に強烈な印象を与えた。しばらくの間、大平の全人生はこの新たな関心に向けられたかのようにだった。私は、彼があるとき、こう見えても学生時代に英語を教えて生計を立てていたことがあると話してくれたことを思い出す。その頃の私との会話ではほとんど英語を使わなかったこともあり、彼はそれを冗談として言ったのだが、これは、彼が当時のささやかな英語の知識をもとにしてでも伝道者の仕事のためにお金を稼ごう、と言う彼の宗教的献身、そのための強靱な精神の在り様を示す格好のエピソードだったと言えよう。

後年、大平は自分の宗教的体験については多くを語らなかつた。でも、ここで明らかなのは、彼の宗教体験が、内村鑑三の無教会運動を引き継いだ矢内原教授の下で教えを受けた

ことで、新たな性格を帯びたということだろう。この教えは、それまでの大衆的福音主義やカリスマ的伝道者による運動ではなかった。そのような感情に訴える教えではなかった。それは思想や理念によって導かれる人々のためのものだった。要するに、その後の大平がそうだったように、知的で政治的な指導者のためのものであった。この体験は、おそらく彼が指導者としての道を歩む上で一つの不可欠なステップだったのだろう。それは、彼が、日本を超えて存在する世界というコンセプト、人間的連帯についての認識、そして国際的な法と秩序についての見識を身につけるのに役立ったに違いない。換言すれば、人類が存続するためには将来的にどうしても達成しなければならない「一つの世界」、その構築のための原理原則について学んだに違いない。

大平は、大正デモクラシーの真正の申し子であった。彼はそれゆえに「ステーツマン」への道を選んだ。その当時、日本では官僚は権威があり尊敬されていたが、大平は、単なる高級官僚への道に安住することをあえて潔しとしなかったのだ。彼は、ステーツマンとして、日常的ニーズを超えた視野を持ち、この国を時代遅れの国際的な孤立の過去から、国際的な協調と貿易というより広い地平に導くために身を捧げて来たのである。それこそが、日本が

世界の中で生き残る唯一の道だからである。

第二次大戦前夜から戦中時代 — 社会への波乱の門出

大平が、日本の経済学専門の指導的国立大学である一橋大学を卒業するまでには、大正デモクラシーの精神は衰微の道をたどっていた。軍部が一八九〇年の憲法の曖昧さを利用して、事実上この国の支配権を握るようになったからである。大正デモクラシーの政策は、世界貿易と米英との緊密な協力関係を基軸にしていた。しかし、日本の軍部はそれとは正反対の政策をとり、あらたに中国に軍事進攻をはじめ、日本を米英二国との対決の道にひき込んだ。自国の資源だけでは、工業用・軍用ともに十分な石油が得られない日本は、これらの大國との戦争を選ぶか、軍部が難色を示す（大陸からの）撤退を選ぶかと言う困難な選択を迫られることとなった。

この事態に対する大平の態度はどうだったのだろうかとは尋ねるが、この点に関して記録は黙して語らず、である。しかし、彼の考えが、私や多くの若者と同じだったであろうこと

は間違いない。当時起こっていた事態に対し、われわれは困惑しつつも注視するのみだった。職業についたばかりのわれわれには、個人的に何かできることがあるとは思えなかった。私は、アメリカ軍から半ば強制的に日本語の無線暗号の解読と翻訳の任務を命じられるまでは、学生生活を続けるほかなかった。

戦争が始まったとき、私の選択は簡単明瞭だった。私は、日本が中国や他の国々を征服しようとし、アメリカに「卑劣な」奇襲攻撃を加えたことは間違いである、との判断自体に何の疑いも抱かなかった。大平の立場はといえば、民主主義や国際協調への信念と、一方では祖国への当然の愛国心との間で揺れ動いて、私よりはるかに混乱していたに違いない。卒業とともに大平は、政府の最も重要な文官官庁の一つである大蔵省に入り、社会的に地位の高い数少ない新任ポストを手に入れた。最初の重要な配属場所は、日本軍が内蒙古という名のもとに手に入れた中国北部の広大な地域の主席文官代表であった。

戦後の大変革期 ―官僚から政治家への転身

大平は、キャリア官僚として重要な地位につながる選ばれた人だけの急峻な階段を登って行くのだが、その後の数年の歩みについては、本書に詳しく記述されている。戦後のその期間、彼が枢要な役割を担えたのは、特に戦後初期の数年間の厳しい復興の時代に、政府全体の運営の決定的な司令塔だった大蔵省に所を得ていたからである。

しかし、戦後の大変革のこの時期に、大平は、権勢と名誉を約束された大蔵官僚から、それより不確かな政治家の道へと転換する重大な決断をした。一九四七年の新しい憲法によれば、国会は「国権の最高機関」となり、「国の唯一の立法機関」となった。これにより国会は、官僚はもちろんのこと、象徴天皇をも、さらに、専横を極めた旧軍隊の解体後に生まれた軍隊をも統べるようになったのだ。ちなみに、日本は、実はすでに戦前からイギリス議会の基本制度を採用していたのだ。一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、軍に外交そして全政府の権力を掌握されるという（空白）期間があつたにせよ、実際には、それ以前の大正デモクラシーの時代に、すでに議会制民主主義の道を歩んでいたのである。

国会に権力が移行したのを受けて、何人かの野心的な官僚は官界を離れ、権力を手にする究極の道として政界に転身してきた。外務省の吉田茂が先鞭をつけ、一九四五年一〇月から一九五四年一二月までの九年間のうち六年間、総理大臣をつとめた。そして、一九五七年から七二年までの一五年半のあいだに、このポストに三人の政治家がついたが、三人とも戦前の官僚だった。この三人のうち、一九六〇年から六四年のあいだ総理をつとめた池田勇人は、大平に最もよく似ている。彼はまぎれもなく、大平に最大の影響をあたえた人物である。彼は大蔵省で大平の先輩だった。早くからこの後輩が気に入り、その判断力に信頼を寄せていた。池田は、後に大平が見せるのと同じように適切・確乎たるリーダーシップを発揮した政治家だった。彼には幅広い政治的視野と、ゆるぎない樂觀主義があつた。しかし、一九七二年が過ぎると、政治権力は次第に官僚の経験をもたない党人派の政治家の手に握られるようになった。大平のような政治家がむしろ例外になつてきている。

池田や吉田、その他、戦後のすべての首相は非常に親米的だったが、なかでも大平が傑出していた。そして彼らは、戦後日本の不備な軍事態勢を補完するため、日本自身が軍事的役割やその旗振り役的立場に迫り込まれないかぎりは、全面的にアメリカに協力をしてきた。

日本の世論はかなり厳格な平和主義に傾いていて、自分たちが国際紛争や軍事紛争に巻き込まれるいかなる役割にも不安を示した。その世論が民主的政治システムに組み込まれてしまえば、政治家を身動きできなくしている。彼らの個人的意見はどうあれ、日本の指導者の誰もが、日本を戦争に巻き込む危険性の少ない「低姿勢」外交へと追いやられる羽目になっている。

私の見た日本の政治システム —— 英米と異質、されど十分に先進民主主義国

日本の統治システムは十分に民主主義的であると言ってよい。しかし、モデルとなったイギリスのそれとはまったく違っている。さらに三権分立と強大な大統領権をもったアメリカのシステムとはそれ以上に大きな違いがある。日本の民主主義がイギリスやアメリカのやり方と違っている主な理由は、日本の特異な選挙制度にある。

衆議院、すなわち下院は大半の立法権を行使するが、議員はいわゆる中選挙区制によって選ばれる。選挙区は有権者数に応じて三名から五名の定員で構成されている。投票者は一票

しか投票権をもっていない。その結果、ヨーロッパ諸国によく見られる複数政党が並存する比例代表制に近い結果が出るようになっていく。しかし、ヨーロッパほど小党分立ではない。選挙区で二〇%程度の得票数をとれる政党は、通常、定員議席の一つを確保して生き残れるが、それ以下の票数しかとれない政党は事実上消滅するのだ。

イギリスであれアメリカであれ、二大政党制は、もし中選挙区制を採用すればほぼ確実に破綻するだろう。なぜなら、その二党以外に、幾多の政党や、単独公約で票を集める候補者とか地方のヒーローなども含む諸派が並べば、どの党も過半数をとることが難しくなるだろうからである。中選挙区制のもとで大政党が過半数の議席を得るには、それぞれの選挙区の有権者を説得して、同じ党内で立てた複数の候補者のあいだで、均等に投票数を分け合あう必要がある。だが、そのように選挙民を説得するのは至難のわざである。

第二次大戦前の日本には、一八七〇年代と八〇年代の政党運動から生まれた二大政党が存在していた。両党ともに経済政策においては基本的に保守的だったが、軍隊や文民官僚、宮廷貴族階級に対抗して彼らから権力を勝ち取ろうとする点においては、リベラルであった。

彼らは、イギリスやアメリカの二大政党のように見えていたが、イギリスほどイデオロギー的に分裂はしておらず、また（党議規律の面で）混沌としたアメリカ議会よりははずつと良くまとまっていた。

戦後の初期には、これら戦前の二大政党の伝統を引き継いだ二つの政党（自由党・民主党）が政治を支配し続けていた。しかし一九五五年までに、どちらも独自に国会で多数支配を続けることができなくなってきた。社会党、共産党、民社党、そしてその後に出てきた公明党などの小政党が成長してきたのだ。戦前の伝統を引き継ぐ二大政党のどちらも、これらの諸政党を相手に多数派を勝ちとることができなくなってきた。しかし、左寄りの比較的新しい反対諸政党と比べると、両党は保守的政策を共有する部分が多かった。このための両党の解決策は明快だった。二つの政党が自由民主党（自民党）として合併することであった。ちなみに、この名称は過去の両政党の歴史の名残をよく表しているといえる。

日本の政治がイギリスの議会制度と違ういま一つの点は、その構成にある。イギリスと違って、日本の国会議員はそれぞれ地元の選挙区の出身である。選挙に当選するには、基本

的には、地元選挙民への個人的な公約と、カリスマ性というのはい過ぎかもしれないが、個人的な人気に頼っている。そうだとすれば、彼らはアメリカの議員とよく似た立場なので、アメリカの議員と同じように党議に従うのにかなりルーズでは、と思うかもしれない。ところが案に相違して、日本の議員は党の決定に忠実に従い、自党の法案に投票する強い規律性を持っている。この現象の主な理由は、おそらく日本社会特有の集団的行動の性向だろう。ほとんどの日本人が、自分達は組織に属していると考えている。若手の国会議員は、党内での地位や役職を得るのに、自分の派閥の先輩議員に頼る。一方、派閥のボスは、より高い地位を、究極的には総理大臣という地位を手に入れる抗争のため、派閥議員の支持に頼ることになる。個々の候補者はいえ、地元の個人的支持者の票集めによって、基本的にはアメリカ流に近い（地元優先）方式で選出される。結果として強力な地元利益誘導型の議会になっている。その一方で、党議拘束と言う面から見ると、ワシントンよりはロンドンに近い規律遵守性が見られる議会でもある。このように英米両国の議会を組み合わせたとような議会が日本に存在するわけである。

自民党支配のメカニズム — その功罪（日本のコンセンサスとリーダーシップの欠如）

日本の政治家のほとんどは、選挙運動の費用を援助してくれる実力者を求め、何らかの派閥に身をおいている。政策というよりは野心に基づいて覇を競う派閥のリーダーは、党を支配しようとするさまざまな合従連衡を繰り返す。派閥政治は党に望ましい柔軟性をあたえ、党首の交代や政策の変更が容易になる。評論家の中には、自民党は単一の政党ではなく、いくつかの政党の寄り合い所帯で、そのお蔭で、幅広い人材と政策を豊富に擁し、その結果、いつ何時選挙があっても、過半数の有権者の支持が得られる、と評する人も少なくない。そして、これまでのところ、実際にそれなりに成功している。一九五五年以来、歴代の総理大臣は自民党の総裁であり、絶対多数派を維持するために一部の外部勢力の支持を必要とすることは、これまでごく稀でしかなかった。

自民党の揺るぎない支配は、当然ながら、同党に強大な力と複雑な組織をもたらし、実質的に全国的組織を持たないアメリカの政党と異なり、自民党は、党役員と委員会による巧妙な構成組織を持ち、それが実質的政策決定者となる。提出された法案は、党と関係省庁の

あいだの複雑な交渉の洗礼を受ける。その他に、大企業や商業団体、関係利益団体、野党など、さまざまなグループとの延々と続く会議にかけられる。その試練を経た原案をもとに、法案は通常、官僚によって作成される。その上で、再度党内の一連の複雑な委員会の審議や党のチェックを経て、最終的に内閣で承認される。法案は前もつてこのように入念に検討され、あらゆる利益団体がすでに言うべきことはすべて言っている。したがって、国会での議決は、通常、結果の分かっている退屈なイベントだ、と言っても過言ではない。ワシントンやロンドンで見られる政治論議を活性化する舌鋒鋭い討議や雄弁な演説は殆どない。このように、三つの国のシステムはそれぞれ大きな違いがあるのだが、それにしても日本の国会の手続きは、どの観点から見ても、米英両国とまったく同様に民主的である。

派閥のリーダーたちは、それぞれの派閥の大きさを競う。一方では、他派閥のリーダーの支持をとりつけ、有力対抗馬を抑え込もうとするなど、手練手管で総裁の座を争う。このような状況は、コンセンサスを通じて同意を得ようとする日本の政治のごく普通のスタイルである。しかし、これこそが総理大臣を一国の指導者として弱い立場におく結果になっているのだ。総理大臣は、人々の感情を損なわないように注意しなければならなくなる。他の派閥

のリーダーに取り入らなければならない。また、彼が勝利を収めたあとも、自分の派閥のメンバーからの支持を取りつけ、その維持に腐心する。彼は、彼らのために余分な選挙資金を工面する。党組織や国会で影響力を持つポストにつけなければならない。しかも、彼は自分の派閥の中でも低姿勢で話さなければならない。外国での発言についても非常に慎重になる。欧米の大統領や首相が自国のために大胆にしゃべることが出来るのに、日本の首相は腰を低くしなければならぬ。さもなければ外国の政府から誤解され、日本国民自身からも批判を受けることになる。結果として、日本とその緊密な同盟国とのあいだで多くのやっかいな誤解を生じることとなる。最善をつくすという約束は、相手国からは合意とうけ取られるのが普通である。しかし実際には、約束をとうてい果たせないのに相手の気休めに、最善をつくすという言葉だけの約束になることが多い。

宰相への道 — 日本的政治手法で政治を行い乍ら自らの信念に忠実であり続けたステーツマン

大平の官僚・政治家・総理大臣としての経歴は、本書の中で詳細に記述されている。それは、日本の政治がどのようにと行われるかを明解に教えてくれる。彼は、日本の政治手法

で政治を行いなから、自らの信念に忠実であり続けた。その確乎たる政治信念を曲げることは遂になかったのである。総理大臣になつてからも、日本のリーダーとしてはめざらしく、毅然とした姿勢を貫きこれまでになく強い指導者になつたのである。

大平には、他の大物政治家との有無相通する関係という面で幾多の強みがあつた。一橋大学の同窓会とのつながりも有益であつた。しかし、それ以上に重要だつたのは、大蔵省の成功したOBとしての経歴であつた。この役所での経歴は、おそらく官僚的バックグラウンドとして最上だと言えよう。

大平は、官庁でも党内でも人望があつた。彼は威張つたり威圧したりすることなく支持をかちとる術を知つていた。彼の温和な人柄は、その手腕や強い意志と相俟つて、党の先輩からも後輩からも好かれた。ついには、派閥のリーダーとして、さらには総理大臣として、池田のあとを継いだのが大平であつたことは、何ら驚くに当らない。

私は、大平が何時いかなる時でも、泰然自若としてゐる様子に深い感銘をうけていた。日

本人は、他の国民に比べ、他人、特に外国人からの批判を神経質なまで気にする傾向がある。大平には、それが少しもない。いつもゆったりとしていた。彼はずんぐりした体形で目を惹くタイプではなかった。身だしなみの上でも決しておしゃれとはい難かったが、そのことを気にすることはなかった。むしろ、人はそのせいで彼の前に出ると、くつろいだ気持ちになれたのかもしれない。私はかつて、彼が東京からワシントンを訪問した際、長旅の疲れからかソファーに身を横たえて重要な会議を待つうちに、ついまどろんでしまった場面に出くわしたことがある。あわてた彼の同僚がすぐ起こしたのだが、彼は自分のふるまいがいささか作法に見えるだろうことなど気にしていない様子だった。この出来事は、彼のいつもの眠そうで屈託のない容貌にぴったり平仄が合っていた。日本人のほとんどが、彼のこのような飾らない挙措に困惑するどころか、ユーモラスな親しみを感じていたように思われる。一種の逆カリスマ性の魅力というべきなのだろうか。

私が大平に始めて会ったのは、彼が池田内閣の官房長官をしていた一九六一年の春だった。その時は、私にはこのポストがどれほど重要なものかわからなかった。彼はどちらかというと印象の薄い、内気な人物に見えた。私が彼をもっとよく知るようになり、彼に対す

る印象を完全に変えたのは、池田が彼を外務大臣に据えたときであつた。彼はあまりしゃべる方ではなかつたが、彼の言うことは筋が通つていたし、いつも率直で信頼ができた。彼の言葉は絶対に信用できることが段々分かつてきた。私は彼に全面的な信頼感を持つようになった。このことは彼がプライベートであれ公であれ、彼がものを言う全てについて当てまつていた。その好個のエピソードをひとつだけ紹介しておこう。

アメリカ政府は、単なる憶測に基づく質問には、特に核兵器の日本領土内での存否についての根拠のない質問には、肯定も否定もしないことにしている。これは、戦術的な理由から必要な用心であつた。日本の世論は、核兵器に対しては、当然のことながら敏感であり、日本は核を「作らない」「持たない」「持ち込まない」という非核三原則を標榜していた。この原則が適用された当時は、「持ち込み」の範囲には日本の水域を核兵器搭載の艦船が航行することは含んでいないこと、それが当然のことと考えられていた。しかし残念なことに、日本の世論は核搭載艦船の航行も含んでいると考えだしたので。野党はこの考えをネタに自民党を攻撃し始めた。アメリカ大使館が困つたことには、日本政府がそれに対し見解をはっきりさせない。ただ、アメリカを信頼していると述べるばかりだったので。その結果、

アメリカが核兵器の「持ち込み」に関する合意に違反をしているのかのような印象を与えることになったのである。

アメリカにとってそれは耐え難いことであった。私は重大な懸念をもって、大平にこの話をした。彼の返事は実に簡単であった。自分は、この問題をよく理解しており、これを適切に解決するつもりだ。ただし、本件については、何人といえどもほかの人に話さないで欲しい、というものだった。私は、彼がその後どういう手を打ったのかは分からなかった。しかし、その問題についての国会質問はびたりと止まり、それが再燃したのはずっと後になってのことだった。そのころには、私はアメリカ大使をやめてついぶん経っていた。大使館と日本政府とも既に別の人間に交代していた。その間、四囲の状況も様変わりしていた。アメリカの海軍が核兵器を載せて日本の水域を航行することは、ほとんどの日本人にとってごく当たり前のことになっていた。この出来事は、それ自体、興味深いものであるが、このエピソードをここで持ち出した理由は、大平への全幅の信頼について、そしてまた彼が政治の世界で事を処すに際しての見事なまでの大平流「マジック」について紹介をしたかったからである。

われわれの交友が始まった早い時期から、私は大平がいつの日か総理大臣になることを確信するようになり、この信念は決して揺らぐことはなかった。彼は、賢明で誠実な信念と、真正の国際性と、誰にも負けない正直さ、そして心地よい人間関係などを兼ね備えていた。実にたぐい稀なる資質の調和に恵まれていたので。彼は行動において節度をもち、殆んど寡黙であつたが、同時に目的の達成において見事で、大いなる実績を上げた。彼は、日本人の観点からは政治家の理想ともいえる人格を持ち、外国人にとつては、彼を知れば知るほど感銘を受ける人物だつた。彼の一見内気そうな性格とはうらはらに、彼は多くの面で才能に恵まれていた。かつて私は、彼が、愈々、政治的頂点を極めようとしていた頃に、どういう趣旨かは忘れてしまつたが、私のために開催されたある歓迎会に、彼が出席してくれるという名誉に浴したことがある。彼は、このような場の常として、一言ご挨拶をとの求めに応じ、即席の短いスピーチを頂いた。それは、私がこれまで聞いたどの国の言葉のどの来賓のスピーチにも勝るとも劣らない親切で適切でユーモアに溢れるものだつた。

大平が総理大臣に就任後、私がたまたま日本を訪問したある日、私は彼の事務所を訪ねた。特別に用事はなかつたが、彼に相応しい地位に座るべくして座っている、その姿を見る

気持ち已みがたくここに來てしまった、と白状をした。しかし、その時の私には、その後のあの運命的死により、彼が本格的にことをなす前にその座から離れざるを得なくなることで、勿論、知る由もなかった。

大平の死で日本が蒙った損失 — 痛恨の思いのなか一國平和主義の日本を憂う

大平の在りし日のことどもに思いを馳せるにつけ、私は大平の死により日本が蒙った損失のあまりの大きさに、今も衝撃をうけ痛恨の極みである。それは、多くの日本人が考えるよりはるかに大きな損失である。大平没後すでに一〇年、日本は一大工業国となり、潜在的な世界のリーダーの一員となった。しかし、日本が気付くべきことは、ここに至り、日本が世界中の国々から疑念を持たれ、反感を招く喫緊の脅威にさらされていることである。日本は、今こそ、大平思想の核心に置かれていた高潔な理念を世界に待ったなしに示す必要に迫られている。しかし、いまの日本には、もはや大平に代わりうる人物は見当たらない。

日本は、自己中心的な国となり、自分達の幸福だけに関心を払っている——そんな評判を

世界中で受けている。日本が長年享受してきた豊かな生活も、国の存立さえもが、国際協力と相互信頼のお蔭であるにもかかわらず、それが分かつていない。日本人は、共に栄えると共に滅びるかの関頭にある人類の一部であるはずだが、彼らは、世界中の人々に対し、自分達がどの国の人々よりもすぐれていると考えているかのような感情的誤解を与えている。それだけに、日本は、今こそ、大平の唱えた人類は同胞であるとの理念を引き継ぐこと、それがどうしても必要である。彼が唱えた環太平洋構想のような、より大規模な地域にまたがる人類規模の組織が必要である。実際のところ、彼がいまなお健在だったなら、多分いま頃は、その構想で全世界を包含する形の仕事をやり遂げていたに違いない。グローバルな協調には、持てる国々による財貨や人材の面での貢献が欠かせない。ところが、今の日本は、大平の遺訓に反して、この点に関する知的理解に乏しく、それを実行する意思をほとんど持ち合わせていないように思える。

大平のような人物がいれば、日本はむしろ尊敬される立場に立ち、その国力に相応しく世界の繁栄と平和に貢献が出来る筈である。大平が献身的に創りあげようとした日本は、現在の金太りの巨人よりも遥かに尊敬されるゆるぎない国になっていたことだろうに——それを

思う時、彼を失った損失は実にはかり知れないものがある。現在の世界的危機の情勢下、私の痛恨の思いは益々募るばかりである。

エドウィン・O・ライシャワー

カリフォルニア州 ラホーヤにて

一九九〇年一月一〇日

市場一六九—ライシャワー大使事件—

「中央公論」(昭和40年10月号)に掲載の「回想の池田内閣」の小節。『春風秋雨』(昭和41年)、『大平正芳全著作集』2巻(講談社)に収録。米大使刺傷事件であり、米国民の反応次第では、政権の命運を左右しかねない非常事態。救世主は大手術後の同大使の日米関係第一との温情あふれるメッセージでした。そのお詫びと感謝の思いを込めた大平の一文です。

昭和三十九年三月二十四日午後零時五分、外出しようとした駐日米大使ライシャワー氏は、米大使館の玄関において、一少年のためナイフによって右足を深く刺された。犯人は直ちに大使館員にとりおさえられ、赤坂署に突出されたが、市場一六九(一九)であることが判明した。

この少年は、警視庁の調べによると「目が悪くて進学もかなわず思うような職業にもつけなかった。社会施設も十分でないで目の治療もできない。この原因はアメリカの占領政策と教育方針が悪いからだ。そのアメリカの日本における責任者はライシャワー大使だと思

い、同大使をねらった」と自供したそうで、精神異常気味の妄想的なところがあるとされた。

この事件は、前二者とちがって、特別に友好関係のある米国の大使が、しかも治外法権をもつ大使館で危害を加えられたものであるだけに、政府に対する衝撃は大きかった。米国のとり方如何では重大な結果になりかねない由々しい事件であった。早川崇国家公安委員長が、この事件の責任を痛感して辞任されたことは、このような日米関係に対する深甚な考慮によることであつたと思う。一方、池田首相と私は直ちに武内駐米大使に訓令して、それぞれジョンソン大統領とラスク國務長官に陳謝の意を伝えさせた。案じていた米国の反応は意外に良く、ラスク長官は、武内大使に対し、日本政府のとつた措置を謝しつつ「このような事件が起つたことは極めて遺憾であるが、米政府は日本人の本当の気持ちをよく判つており、このために日米関係が悪くなるようなことはない」と確信している」といわれた。

翌二十五日午前九時半、病床にあるライシャワー大使は、エマソン公使を通して次のメッセージを発表された。「このたび多数の日本の方々からご好意を寄せられまして深く感謝しております。また日本の医師、看護婦の方々のご親切と能率のよさにいまさらながら感動しております。世界中どこでも精神異常の不幸な人々がいることは、残念ながらやむを得ない

事実であります。昨年アメリカでもとくに悲しむべき実例があつたばかりです。わたくしがただ一つ気にかかる点は、このようなきさいなできごとで、両国の深い友好關係に傷がつくと心配される方がいらつしやるのではないかといいことでもあります。しかし私は、両国のパートナーシップはいっそう密接になり、強化されるものであると確信しております。」

病床で呻吟されている被害者として、駐日米大使という要職に在られる方として、何という優しい行き届いた心遣いであろう。大使はまたいち早く虎の門病院の病床にある御自分の姿を、看護に当られておるハル夫人のそれと共にカメラに収められ、その日の新聞各紙に提供されたが、軽い微笑を浮べられた大使の表情は、「日米両国の皆様心配されないように」といわれておるようであつた。大使は全然自分の経験されておる苦痛や加害者の不心得、さらには日本政府の治安行政上の不手際等については一切触れられないで、ただ一途に日米間の友情の絆を気づかわれたのである。また大使館当局はいち早く迅速かつ適切な措置をとられた。そのためこの不幸な事件のもたらすであろう波紋が喰い止められたばかりか、むしろこのことによつて日米間の絆はいっそう強化される結果を招くことができたのである。その後、大使が日本人の血の輸血を受けられた時、「これで私は日本人と血を分けた兄弟になれた」と述べられたことは、禍を転じて福にしようとする大使の悲願をよく表しておるように

思う。

ライシャワー大使は虎の門病院で一応の治療を終えられ、治療と静養を兼ねて四月ハワイに赴かれたが、われわれの祈りと期待に背かず全治されて、六月帰任された。そして日米両国の外交は引き続きこの大使の手によって運営されていたことは、両国民にとつての大きな喜びであったといわなければなるまい。

奇妙な地図

「文藝春秋」（昭和46年6月号）に掲載。『硯滴Ⅴ』（昭和46年）、『在素知贅』（平成8年）、『大平正芳全著作集』3巻（講談社）に収録。ライシャワー大使が持ち出した奇妙な地図。そこからヒントを得て早速「楢円の理論」的視野で社会の諸課題を地図化する議論に花が咲く—このような知的会話も間々あったにちがいない、と思いつつ本稿を選びました。

ライシャワー前駐日米大使が、ボストンに帰任されてから既に久しいが、折に触れ懐しく思い出される人である。日本に生れ日本人を妻とし、日本の歴史や風物に深い愛着と理解をもたれた心の優しい学者である。今でも毎日、米の飯とみそ汁は欠かされないし、おもちは大好物であるという。専門は東洋史であるが、政治や外交にも立派な見識をもち、数々の事蹟を残された人である。

そのライシャワーさんがまだ東京で大使をしておられた頃のことである。偶々米大使館を訪ねた私に、ラ氏は得意そうな微笑を浮かべながら、書斎から奇妙な一枚の地図をとり出し

てきた。その地図は、奇妙というよりはむしろグロテスクなもので、アメリカや欧州は地図の全面に広い紙幅を占めておるが、アフリカ、アジア、南アメリカ等は、欧米の巨体にぶらさがる小さい尻尾のように申訳的につけ加えられていた。つまりそれはGNPの大きさを地図の平面にひき直したものであった（暫らくして、この地図はある日本の雑誌に紹介されたようだ）。

私はその地図を見てその着想を面白いと思った。地図というものは、これまでのように、物理的な空間の拡がりを示すに止まらないで、機能別に幾らでも作れるし、また作る必要があるのではないかと思った。例えば航空、航海又は地上の走行等に要する時間で作ることもできるし、特定の物資の運賃によって作ることもできる。更にはGNPの大きさの代りに知識や情報の分量とか、中枢管理機能の大小によっても作ることができる。むしろ機能別に色々な地図を作ってみることが、われわれのもつべき世界像というものを、より真実に近いものにするのに役立つのではないかと思ったのである。

そうは言っても、人間というものは、利口そうに見えて案外愚かなものである。子供の時から学んだ地図によって形成された世界像の呪縛から、容易に解放されないものであるようだ。交通や通信は近來著しい発達をとり、世界の姿も一変した。それなのに政治経済その他

人間の営みは、そうした変化に必ずしもついていけない怨みがありはしないか。このことを手近なところで見てみよう。

わが国の面積は三十七万平方料といわれ、その人口や経済規模に比し著しく小さい。しかもわれわれの経済活動は原則として平地で展開されるが、日本の平地は全国土の一六パーセント程度に過ぎない。それはソ連の百分の一にも満たず、アメリカの五十分の一にも足りない。

だから日本の平地は、極めて集約的に利用されなければならない。ある学者の推算によるとわが国の平地の利用度は平均してアメリカのその十倍に上るといふ。それでいてその利用が著しく偏つておる。全国土の百分の一に満たない市街地に全人口の約半分が住み、太平洋ベルト地帯に全人口の六割以上が、交通や公害その他人口の過密のもたらす諸問題の異常な緊張の中に生きておる。ところが一方には太陽と緑に恵まれた集落や村の多くが、解体離散の憂目を見ている過疎地帯が同居しておる。出稼ぎの人々にまつわる悲劇も今尚跡を絶たない始末である。それは要するに人間のもつ惰性に加うるに、雇傭その他経済の機会が局地に偏在しておる結果であるように思われる。しかしより正確に言うならば、経済の機会が局地に偏在しておるにちがいないという意識が生んだ結果であるといえよう。今日われわれは

自動電話で全国到る処に即時通話ができる。海陸空の交通機関は急速に発達し、いわゆる経済距離は大幅に短縮した。われわれは最早、人力車の時代に形成された日本像に捉われていなくてもよい筈である。ところが廃藩置県の時そのままの府県制を今尚大切にしておるよう、われわれは東京や大阪に出なければ経済の機会を掴むことがむづかしいと考え勝ちのようである。ところが交通通信の発達は、近代技術とそのシステムの活用によって益々加速化してきた。経済距離はそのため愈々短くなり、情報の伝播と整理は、コンピュータの導入と相俟つて事実上、時空を克服しようとしておる。ここらあたりで、これまでの日本像から脱却した眼識で、政府も民間も、日本の国土利用の在り方を、根本的に考え直してみる必要があるのではなからうか。

それかあらぬか政府も、新全国総合開発計画の策定にとりかかり、一昨年春にはそのスケルトンを発表した。それは北海道、本州、四国、九州の四つの島全体を、一貫した政策の対象とするもので、新産業都市や工業整備特別地域更には低開発地域の開発計画や離島振興のような局的なものではない。そのためにまず交通、通信の幹線網の全国的な整備を目論み、それを軸として日本人の生活と産業と文化に一大新生面を切り開こうとするもののである。私はそこに示された壮大なヴィジョンと、それに対するアプローチの手法が、全国

民の理解と協力を得て、目標とする昭和六十年を待たずに、着々具体化することを希求しておる。勿論この計画には、色々な不備や注文があるろうが、新しい日本像に根ざした野心的な試みとして、私はこの企てを高く評価したい。

What & How

「エコノミスト」(昭和42年10月24日号)に掲載。『硯滴』(昭和42年下期)、『在素知賢』(平成8年)、『大平正芳全著作集』2巻に収録。半世紀前の本稿は、現下のコロナ禍の下で、驚く程時宜を得ている。現況は「未曾有の不完全雇用の世界」。それだけにその出口戦略は誰にとっても試行錯誤の世界。与野党共にそれを認め謙虚になりWhatとHowの共有が必要と説く。ケインズの着眼の勧めも鋭く、今の国難のために書かれたかの様です。

いまの日本の政治にとっては、各政党の勢力の消長ということに本当の問題があるのではなく、政治そのものに対する根深い不信(それには道義的な面もあれば技術的な面もある)と、政治的無関心の無気味なひろがりとにどう対処するかが、問題の核心になっているといえよう。

われわれはまず今日の日本の政治にとって何が一番重要な課題であるか、そしていかにしてそれにアプローチするか、すなわちWhat&Howが、このさい真剣に追及し直されなければ

ばならないことであるように思われる。それは権力の座にある政府と与党ばかりの課題ではもちろんなく、野党にとつても同様看過できない課題である。いやひとり政党ばかりでなく、広く全国的な課題でもあるといわなければならない。

今日の時代は大きい変革の時代であるといわれる。技術の革新は生産力の飛躍的な増大をもたらした。交通通信の空前の発達は地球をいよいよ小さいものとし、われわれの生活空間をいよいよ大きいものにした。経済における消費とレジャーの比重は著しく増大し、その内容はますます多様化してきた。しかし、いうところの変化は、このような現象面にとどまらず、われわれの意識の世界にも広く深く食い込んできた。

たとえば多党化の現象である。それはひとりわが国の政界にのみ見られる現象ではなく、大きくは世界の構成（共産圏の分極化、自由圏の多極化、南北の乖離、後進圏の混迷など）そのものから、小さくはわれわれが参加する社会や家庭（労資の間ばかりでなく、新旧上下の間に見られる違和感など）の中にさえ見られる一般的な現象である。また、イデオロギーというイデオロギーは、かつての権威と光彩を失い、その支配力は著しく減退してきた。

これらのことは、要するに今日の時代の変革が、その規模において、その内容において、手軽な把握を許さないようなものとなつてき、したがって現状をどう把握し、未来をどのよ

うに展開するかについて、われわれがまったく途方に暮れているところから生まれてきたと見るべきであろう。つまり「未来の道標」がさだかにつかめなくなり、「未来への確信」が薄れてきたところに、このような多党化の現象が芽生え、イデオロギーの後退が生まれてきたのではあるまいか。

一方、生産力の躍動の中に、巨大な経済王国がその雄姿を現わしてきて、もはや権力にとつては手に負えないものになりつつある。巨大な経済力は、権力をよそに、経済人の手によつて縦横に駆使され、組織され、優れたエリートたちは、生涯の命運を、この巨大な経済力のダイナミズムに進んで任ずることになってきた。そしてそれは巨大な自律的なメカニズムとして成長しつつある。

生産力の躍進は、その当然の結果として、消費の増進と多様化をもたらし、労働時間の短縮を通じて、レジヤーの増幅を招くことになった。

マルクスは、生産関係における人の立場を中心に、いわゆる資本制社会の分析と展望を試み、その壮大な哲学を築いたが、いまやわれわれは消費とレジヤーを中心に新しい経済社会学を打ち樹て、未来社会の展望を考えなければならなくなってきた。資本家も労働者も、この世界においては、まったく等質なものになりつつあるからである。

今日の時代の変革をとらえるには、他にもいろいろの方法や角度が考えられようが、ちよつと見たところだけでも、以上のような振幅のはげしい変革の過程にわれわれの時代はあるといえる。そうだとすれば、今日の政治が旧態依然たるものであつてよい道理はない。何を主題とし、どういう方法でそれへのアプローチを試みるかという、新しい至難な課題に直面しているといわなければなるまい。

われわれの主題が、したがつて過去の思想や手法を守株し、その城砦を犯すものをしりぞけることであつてよいはずのものではない。これまではどうやらそれでやつてこられたが、これからはそれではいけない。しかし、過去の思想や手法に対する郷愁から自由になることは、必ずしも容易ではない。未来への展望と確信が十分もてない時代にあつては、せめて昨日まで通用してきた思想や手法に頼りたくなる心理もよくわかる。しかし、それではどうしようもない時代に、われわれはすではいり込んでおろことは間違いない。

そうだとすれば、われわれはもつと謙虚にかつ反省的にならねばならないのではなからうか。この反省は同時に、自分と立場を異にする者に対する同情とか共感を呼ぶことになる。彼らもまた自分と同様、新しい時代の門口に立つてどうすればよいかに苦悶しているにちがいないことが理解されるからである。また、この反省は、自分の無知をしみじみかみしめる

ことになると思う。驕慢を戒め、孤高をさけて、本当の意味における無知から出発しようという心情を養うことになると思う。

このことはとりわけ政治のあり方に深い省察が必要になってくる。政治は支配の原理であるという思想は、それが保守・革新いずれの衣を装っていようと、もはや牧歌的なノスタルジアにすぎなくなつた。知識と技術、政治力と経済力がこれほど普及してくると、政治は古い「支配」のステージからおりて、賢明な仲介の立場に立たなければならなくなつてきた。そして賢明な「仲介」のあり方は何かということが、本当に求められている実体ではなからうか。そういう反省がわいてくる。

アダム・スミスは、それまでの混沌を整理して、これを樂天的で壮大な体系にまとめあげ、一九世紀的な世界にその道標を与えた。マルクスは、アダム・スミスの描いた世界の分析を通して、そこに一見まったく逆なペシミズムを見てとり、その崩壊の彼方に自由の王国を見るというこれまた樂天的な展望を示した。この二人の天才の間には、結論はちがっていたが、計画のはいりこむ余地のないオプチミズムにおいて共通性があった。

ところが、ケインズは、彼以前の経済学がもつオプチミズムと計画性の無視にあきたらず、それらはいずれも完全雇用を前提にした部分の理論であつたことを看破し、もう一度現

実に立ち還った。そして、そこにある不完全雇用の状態から再出発して、部分の理論を越えた一般の理論と政策を追及した。

私は今日の政界に求められておるものは、部分の理論や展望ではないと思う。世界はすでに小石のようにバラバラに分解された姿になっている。われわれに必要なものは現実を踏まえた一般の理論と展望であって、ケインズの着眼こそが必要であるように思う。そして不完全は不完全のままでも、われわれの工夫と実践が、国民の諧調の下に一大オーケストラになるよう精進することが大切であると思う。

照一隅

前稿と同じく、『エコノミスト』（昭和42年12月19日号）に掲載。『硯滴』（昭和42年下期）、『在素知齋』（平成8年）、『大平正芳全著作集』2巻（講談社）に収録。主張やスローガンが、「政策」の名で唱導される日本の現状を批判し、本当の前進のためには「具体の知識と組織化と方法論」の吟味が必要と論じている。

師走の足音と共に、いわゆる予算シーズンを迎え、急に身边がせわしくなってきた。これは今年に限ったことではないが、財政がいつになく硬直化の様相を濃くしてきたし、私自身が与党の政務調査会長を引受けたので、今年の年の瀬は何となく気ぜわしい。

このところ私は毎日のように多くの陳情団に攻め立てられておる。テーブルの上には、いつの間にか、陳情書と名刺の山がで上がる。そればかりでなく、自治体、農業団体、商工団体をはじめ多くの全国組織の大会が、ちょうどこの年の瀬を期して開催される。他党の代表と仲良く並んで出席し、一場の挨拶をしなければならぬ。自分でユックリ考えを整理し

たり、各方面から貴重な意見を拝聴する時間的余裕に乏しい有様である。

陳情団の言い分には、もちろん局地的な特殊な案件に関するものも少なくない。しかしその多くは、それが代表する組織体の全国的な要望である。その構想は壮大であり、その修辭は雄渾である。陳情団も心得たもので、むやみに多くの時間を取ろうとはしない。要旨を伝えて簡単に引揚げる。全国大会の会場には、大きい紙片にいくつかのスローガンが太い字で書き入れられ、舞台狭しと五月の鯉のぼりのように掲げられる。そしてそれと同工異曲の決議が採択される。

それらは、政策といわんよりはむしろ主張であり、道標といふべきたぐいのものだ。それらの構想は太くかつ壮大なものである。ところが、不思議にそういう主張なり道標を、どういう方法と段取りで実現にもって行くかという方法論にはほとんど触れていない。彼らにとつては、そういう方法論こそは政府与党の仕事であつて、自分たちの関知するところではないというのであろう。ところがこの方法論こそが実は肝心であり、方法論に対する国民の理解と協力こそが、目標自体よりも大切であるといわなければならぬ。

わが国では、それにもかかわらず、それらの主張なり道標なりをそのまま政策として受取り、それらが達成できないとそれは直ちに「政策の貧困」ということで審判を受けたり、そ

こまでいかなくても、大きい不満の種となるのである。そしてかようなスローガンや道標は、すでに馬に食わせるほど多く用意され、いわば氾濫状況であるとさえいえる。それらが達成できないからといって、いちいち審判にかけられてはたまつたものではない。

今日の日本は、近代国家として、国民のあらゆる生活領域に曲がりなりにも各種の政策的アプローチを試みておる。それを受け止めておる国民の側には、それらの実行方法の遅速や巧拙、そのもたらす利害や得失を十分知悉しておるにちがいない。そういう具体の知識を丹念に整理組織して、それぞれの所管官庁や政党を啓蒙し、あるいは鞭撻できるはずだ。そういうことが実は壮大なスローガンの主張よりは大切である。政策的裾野の状況把握とその改善の方途こそが肝心なのである。

国民生活は、かような政策的裾野そのものである。そこにはそれぞれの政策が交錯しておる。この交錯状況の中に、それぞれの政策の優劣や緩急の度合い、さらにはコストと効果の関連が身近に感得されておる。その生きた知識は、官庁や政党に遠慮することなく具申すべき貴重な素材である。官庁や政党もまた、かような政策的裾野の状況把握に一層の努力を傾けなければならぬ義務がある。

もちろん陳情や大会は、単なる儀礼や祭典ではなく、それなりに意味がある。しかしそれ

には多くの時間やエネルギーがいる。どれだけのコストがこのために消費されておるかかわからないが、それは膨大なものになるはずである。そうだとすれば、陳情や大会の機会は、もっと活用しなければならぬ。それは壮大な構想を唱道するだけでなく、先に述べた具体の知識と組織化と方法論の吟味に、より多くのエネルギーを傾ける機会にすべきではなからうか。

政策は作文や論稿ではない。またスローガンやビジョンでもない。具体的な方法論にしっかりと裏付けられた実践の体系である。しかもその方法論は全体との関連において位置づけられていなければならない。だから政策は全体を予定し、その中で定着できるものでなければならぬ。学位の付与が、新しい方法論の案出にのみ与えられるべきものだという主張は、その意味において正しい。ここにいう定着度の測定こそが政策の正否、その生産性を決する鍵である。

また政策は、前進ばかりが芸ではない。後退ないしは廃止もあり得るし、また、なければならぬ。老朽化し形骸になった政策の整理は、早ければ早いほどよい。そのために消費されてきた財源やエネルギーは、他に有効に転用しなければならない。

流れてやまぬ川の水がいつも清冽であるように、われわれの社会も、かような新陳代謝が

あつてはじめて、その健康を維持することができる。先に述べた政策的裾野の状況把握は、その意味においても、不可欠のものである。そして、陳情や大会も、それを古い退化した政策の思い切った埋葬の機縁にすることによつて、一段と光彩を加えることになるであろう。

わが国では、主張やスローガンが政策の名において唱道される場合がむやみに多い。新聞や雑誌は、毎日のように数多くの献策を掲げておる。かくて日本国民の進取の精神と旺盛なエネルギーに支えられて、いわゆる「政策」の在庫はうす高く積まれてきた。ところが、その多くはしつかりした方法論の裏付けをもたないばかりに栄養失調におちいつたり、貧血をかこつておるといえる。教育においてしかり、社会保障においてしかり、公共事業においてしかり、経済政策においてまたしかりといわなければならない。

政策において一歩前進することは、一歩後退することと同様、容易なことではない。ところが、戦後の日本は、前進また前進を精力的に続け、後退を知らなかつた。予算は、政府の支出においても投資においても、年々歳々急ピッチの増加を記録し、中央地方を通ずる行政の機構と人員は、これまた増大を続けてきた。そしてそれは「福祉国家」というようなバラ色の理念に支えられて、あたかも当たり前のことであるかのように受取られてきた。前進は当然の道行きであり、とどまることは罪悪であるかのように思われてきた。つまり一度踏み

とどまって過ぎ越し方を振りかえり、それぞれの政策の定着ぐあいを見直してみることを怠ってきたといえないだろうか。いわば日本は、しやにむに短距離的な走り方をこれまで続けてきたといえよう。

「足下を照らす」という古語がある。一隅を照らす灯が全国津々浦々に光照することが、日本にとつて一番大切なことである。それは決して後退でもなく、敗北でもない。本当の前進のためには、そのことがなされなければならぬ。

予算の編成と、いわゆる硬直化克服の要請を控えて、そんなことをしじみ思ふ今日このごろである。

おわりに

鈴木岩男

恒例の大平正芳記念賞授賞式（大平の命日・六月十二日開催）は、残念ながらコロナウイルス禍で中止となりました。そんななか、皆さまに、せめてこの日に『硯滴考』第6号だけはお届けしたい。その一心で纏めさせて頂きました。

今号はライシャワー米国大使の登場です。大平が池田内閣の外務大臣時代に、日米関係強化の一翼を担われた同大使の大平論を中心に、関連する大平の論稿数編を選んで見ました。

ご紹介の論稿「大平正芳と私」は、大平没後十年に出版された「英文大平伝記」の注目の序文です。米国屈指の日本史・東洋史学者でもあるライシャワー博士の見た大平正芳像です。その生涯と思想を辿るとともに、格好の日米英比較民主主義論にもなっています。「英米とは異質、されど十分に先進民主主義国」である所以を論じてくれています。しかし、本稿の結びは、大平亡き後の日本への厳しい警告になっています。バブル経済に浮かれ「もはや外国から学ぶものはない」と嘯く傲慢さ。それが世界の颯塵を買いつつあった当時の日本

のことです。それに気付かない日本の危うさへの真情溢れる忠言でした。しかし、本稿執筆の八か月後の一九九〇年九月一日、ついに帰らぬ人となりました。その翌年にはじけたバブルを見ないままの旅立ちでした。その後の日本の「失われた二〇年」の惨状と無策（新党こっこ・自社野合等）を思うにつけ、右の警告はそれを予告していたかのようでした。それだけに、今度こそは、今まさに迫りくる世界的危機に立ち向かう糧としなければなりません。

次に、右に見合う大平の中心論稿としては、目次冒頭の「日米関係」を選びました。大平が池田・田中内閣の時、前後二回、通算四年余り、外務大臣として対米外交の重責を担った時代の「日米関係」を辿ったものです。その当時、日本でもよく知られていたラスク、ロジャース、キッシンジャー三代にわたる米國務長官と「相互信頼の中で仕事を共にすることが出来た」とあります。特に第一次オイルショック時、物情騒然として浮足立つ政財界の中近東産油国志向を制し、日米関係を不動のものにしたキッシンジャー長官との交渉のくだりは、今回のコロナショックの出口戦略への喫緊の教訓事例としてご覧頂ければ幸甚です。

先の「大平正芳と私」の中で、一貫して述べている二人共有の目的は、「世界に開かれた

唯一の道は『世界貿易の実現』と『国際正義の確立』である」ということでした。そんな中で、米中貿易戦争の激化からすると、前者の目的はまるで遠い昔の夢物語に思えるかも知れません。しかし、保護貿易主義が如何に不毛で将来に禍根を残す愚策であるかは、多くの歴史が教えるところです。その意味で、前者の「世界貿易の実現」の灯を消してはなりません。そのためにはどうすればよいのか。その答えが、後者の「世界正義の確立」であります。自由と民主主義、法の支配などの価値観を共有する国々を増やし結集することです。コロナウイルスのパンデミック化は、世界に未曾有の不安と混乱をもたらしていますが、その一方で、自由圏諸国にとっては、上の価値観の共有と結集の大切さを再認識する貴重な機会になりつつあります。大平・ライシャワー路線に沿って、日米同盟の益々の強化が望まれる所以です。本号が、その理解のための一助になれば幸甚です。

けんてきこう

硯滴考 [6]

令和二年六月吉日 発行

発行者 公益財団法人大平正芳記念財団

〒102-0082

東京都千代田区一番町 10 番地 相模屋第二ビル 5 階

TEL : (03) 3230 - 2213

FAX : (03) 3230 - 2214
